



信仰の歴史を感じさせる二合目手前の鳥居跡

# 山梨の旧道を訪ねて

## 一道一会

富士山 / 吉田口登山道

数々の伝説や信仰に包まれ悠久の時を刻む山、富士山。吉田口登山道の一合目から五合目までは昔日の面影を色濃く残している道



二合目からしばらく歩くと登山道は林道と交差し、そこから十分ほどで二軒の茶屋跡が残る三合目に到着する。三合目に置かれた解説板によると、江戸時代以前、ここには三軒の茶屋があり、三軒茶屋と呼ばれていたそうである。富士山参詣の日程では、早朝に富士吉田を出発すると、ちょうど三合目で昼食をとることが多かったため、中食堂とも呼ばれていた。残念ながら今では木々が高くなり眺望は望めないが、かつては見晴らしが良く、多くの旅人が風景を楽しみながら休憩していたそうである。朽ち果てようとする茶屋の脇で一息つき、いにしえの旅人が

見た風景を想像するのも良いかもしれない。

傾斜を増し木々に覆われた登山道をさらに上る。三合目から四合目大黒天までは約二十分、四合五勺の御座石浅間神社までは約三十五分程の道のりである。

道はよく整備されているもの、さすがに富士山頂へ向かう道だけあって息を切らしながらの歩きとなる。



四合五勺にそびえる御座石

道に入って行き、数分歩くと再び舗装された道に出る。舗装道路を横断したところに五合目の標識が立っており、右手を上ったところで五合目の佐藤小屋に到着する。五合目周辺が「天地の境」といわれるように、ここから景色は一変し富士山の荒々しさが姿を見せてくる。一合目から歩いて来た人は、ここで改めて富士山の力強さと厳しさを実感するにちがいない。

四合五勺に着くと、左手に大きな岩壁が立っている。御座石といわれているこの岩壁は、神のより付く石という意味があるとのこと。かつてはこの岩の上に浅間明神と日本武尊の祠が祀られており、富士講の開祖とされる長谷川角行の修行の場であったとも伝えられる場所である。立ち並ぶ石碑や岩に彫り込まれた文字が歴史の証人のように、かつてこの道が信仰の道であったことを伝えている。御座石を後にして再び歩き始める。

富士山への登山口の一つである吉田口登山道は、北口本宮富士浅間神社から山頂へ至る道である。富士スバルラインの開通前は頂上を目指す人たちがにぎわったこの道を、今回は途中の馬返から五合目まで歩いてみた。「馬返」とは、この先登山道が険しくなりここで乗ってきた馬を返したことから、その名が付いたと言われている。古来より、馬返からは鳴物が禁止されるなど、富士山の聖域であるという認識があり、俗世との境界となる重要な場所であった。

馬返の駐車場から歩き始めると目の前に鳥居が現れる。道の脇にある解説板には、このあたりが昔の富士登山の拠点となっていた場所で、人々が茶屋で登山の身支度を調べたと書かれている。傾斜が急になった道を十分あまり上ると一合目にあたる鈴原神社に着く。戸が閉められた建物が少し寂しいが、静まりかえった空気の中にたたずむさまに心が静まる思いがする。

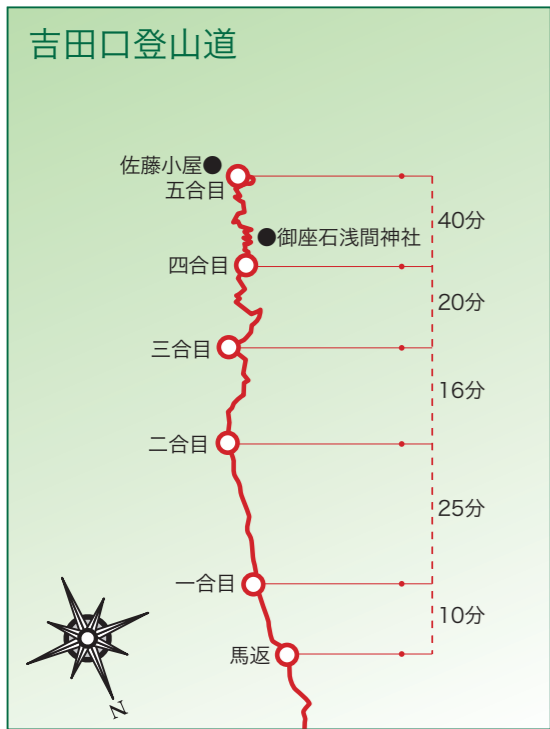
うっそうとした木立の中を二合目へ向かうと、途中に二合目一の鳥居跡があった。柱は朽ち果て

相変わらずの坂道を上っていくと、所々に小屋の跡らしき場所があり、この登山道のにぎわっていた往時が感じられる。やがて道は舗装された道路に出る。舗装された道を右に歩き富士守稲荷の祠の脇で改めて登山

石も苔に覆われているため、注意しないと通り過ぎてしまうが、これが御室浅間神社の最初の鳥居であり、ここから先が神社の境内であるとされていた。坂道をさらに上ると二合目の御室浅間神社が見えてくる。御室浅間神社は富士山中で最初に勧請された神社と伝えられているが、昭和四十七年に本殿が富士河口湖町の勝山地区に移築され、今では残された拜殿のみが在りし日の姿を伝えている。神社をあとにしばらく進むと橋を渡るがその下に一枚の広い石がある。石の面には六十センチ位の穴があり、「御釜」といわれている。江戸時代にはここから先、女人の登山が禁止されていたそうである。



これまでとは全く異なる景色が広がる五合目



馬返にある鳥居